

心理学的対処方略としてのスル的視点と ナル的視点の二重性

深谷 澄男 向井 敦子

1. 問題の発端としての帰属理論と統制の位置

今日の社会心理学において、帰属理論が、主たるパラダイムになっていることは周知のことであろう。「帰属」という用語は“Attribution”の訳語であるが、その意味するところは、“S attributes Y to X.”ということ、つまり「SはYというデキゴトの原因がXにあるとみなす」、あるいは「SはXのせいでYが生じたとみなす」ということである。例えば、ボールAがボールBに接触するというデキゴトXと、静止していたボールBが動くというデキゴトYとが、時間的に空間的に随伴するときに、XとYの共変関係が現象的に原因と結果の体制として認知される傾向がある。そして、たとえXが直接に観察されなくても、結果Yを観察することでXを原因として想定する傾向があるという。このような因果性（causality）の認知と帰属の傾向を、初めて定式化したのはF. Heider⁽¹⁾であり、その着想を引き継いだE.E. JonesやH.H. Kelleyによる理論化を媒介として理論的・実証的研究が精力的に展開されている⁽²⁾。

帰属理論では、人は、共変しあうデキゴトを因果性によって体制化し、さらに、デキゴトの発生に関与するより安定的で持続的だと思われる要因に原因を帰属することで、デキゴトの発生を能動的に予測し統制するように動機づけられている、と仮定している。だとするならば、デキゴトの認知や解釈のための理論という受動的意義に留まらず、帰属理論は、行動の形成や矯正に対しても積極的な役割を果たしうるはずである。諸研究によれば、デキゴ

トの統制位置を内あるいは外のいずれに帰属するかということがクリティカルな問題であり、実際のところ、統制の位置を外から内へと帰属操作することで向社会的 (prosocial) 行動を誘発しうるのは、多くの研究が指摘しているところでもある。⁽³⁾ 例えば、統制位置と達成動機を関連づけて B. Weiner⁽⁴⁾ らは、内的・外的・安定・不安定・意図的・非意図的の 3 次元の組み合わせで成功・失敗の帰属が説明されうると提唱している。つまり、(1) 安定要因への達成帰属が高いほど、成功のあとに成功を、失敗のあとに失敗を期待する。(2) 不安定要因への達成帰属が高いほど、将来の成功・失敗への期待が低くなる。(3) 内的要因に達成帰属されるほど、成功したときに自負心が、失敗したときに屈辱感が大きい。外的に帰属されるほど、このような感情は小さい。(4) 達成の原因帰属によって生じる期待水準と情動とが、次の課題場面での行動の仕方に影響する。彼らの見解に従えば、達成期待は安定性の次元から、達成に伴う情動は内的・外的の次元から発生することになる。

言うまでもなく、内と外という概念は帰属理論に固有のものではなく、例えば、K. Lewinが $B = f(P \times E)$ と心理学的命題を一般化するときの人⁽⁵⁾ (P) は内的要因であり、環境 (E) は外的要因である。例えばパーソナリティ、情動、意図、病気などは人そのものが担う内的要因であり、一方、他者の行動や天候などは外的要因である。このように、当該の人そのものにまつわって内と外とを区別するのが普通であるが、それではあまりにも直感的であり常識的すぎる。自己統制感に基づく意図性を重視する Heider の立場からみると、信念や意図などは内的要因であり、病気や情動などは外的要因となる。

統制の内的・外的位置を操作的に規定するにあたって、B. Rotter⁽⁶⁾ の構成した I-E (Internal-External) 尺度がよく使われる。Rotter は、人間行動の目標指向性を強調して、行動に随伴する強化の諸経験を通じて一般化された強化随伴性の期待が、そのときどきの事態における行動を決定すると言う。強化が自分自身の行動に随伴して帰結することへの一般化された期待は、心理学的事態を統制する行動主体としての自らの能力や努力や技能

などの内的要因に結びついて、事態に能動的に対処する行動や態度を解発する。他方、強化が自分自身の行動に随伴して帰結しないことの諸経験が、運や課題の難易などの外的要因によって統制されているという認知を一般化させ、事態に対する受動的な行動や態度を誘発する。このような心理学的事態の統制位置の一般化された認知を、Rotterはパーソナリティの変数とみなして内的統制型と外的統制型とを区別しているのである。

I-E尺度は、2肢強制選択による29項目（そのうち6項目は無関連）で構成されている。例えば、第2項目の2肢は次のようである。

- a. Many of the unhappy things in people's lives are partly due to bad luck. (人生における不幸は、多くの場合、なかば不運が原因である。)
- b. People's misfortunes result from the mistakes they make. (人生における不幸は、適切な行動をとれなかったことが原因である。)

行動主体の能力や努力などを強調するbタイプの意見に対して、運などの外的要因を強調するaタイプの意見を選ぶとE得点として加算され、E得点が高いほど外的統制型と判定される。この尺度で日米の大学生被検者の傾向を比較してみると、筆者らのデータでは日本人被検者の平均E得点が約11⁽⁷⁾で、Rotterが報告しているアメリカ人被検者の場合では約8と、明らかにアメリカの大学生のほうが日本の大学生よりも内的統制傾向が強い。このような差異は、例えば土居健郎による「甘え」⁽⁸⁾や、中根千枝による「タテ社会」⁽⁹⁾の指摘などに合致するところとみなしてもよいだろう。この拙論を読まれる方の大多数が日本で生まれ育った日本人だと思うが、そのような読者自身が上例のaあるいはbを自分の意見として選ぶとしたならば、恐らく、いずれにも決め難く感じられるのではないだろうか。表現が多義的なせいもあろう。bの意見に例えば、“because they have little knowledge of their own efficacy.”などと背景を付け加えれば、外的と判断することもできる。その他の諸要因が、交錯しているのかもしれない⁽¹⁰⁾。それにしても、日本的感覚からすると、I型の意見ではちょっと楽天的すぎるように思えてならない。

Rotterによれば、I型の意見は能動的な態度を反映し、E型は受動的な態度を示唆するという。「能動的—受動的」ということをどのように定義するかによるが、とりあえず、より適応的かどうかと読み換えてみたとき、日本人的感觉からすると、E型の態度がI型より不適応的であるとは必ずしも言い切れるものではない。なぜ、このようなズレを覚えるのだろうか。このようなズレの覚知は、なにを意味しているのだろうか。

2. 欧米人的行動論理と日本人的情况論理

もうかなり前のことであるが、テレビで「エデンの東」を観ていたとき、ジェームス・ディーン扮するキャルに兄アロンの恋人アブラが「愛されているが愛されていない」というようなことを言っていた。記憶も定かでないし、日本語放送であったため英語でどのように表現されていたのか解らないが、字句どうりにとれば矛盾しているこの言葉が妙に気になって心の片隅に残っていた。この疑問が氷解したのは、土居の甘え理論を知ったときである。「相手との一体感を求める感情」とか「受身的対象希求」などと定義される甘え理論に従えば、アロンは「愛されたい」という受身的願望を抑圧して、意識的に「愛する」という能動的態度をとっていたと理解できる。そのような無理がアブラの心に投影して、「愛されているが愛されていない」と言わせしめたのではないだろうか。土居は、「甘え」の概念がS. Freudの「同一化」に相当することを指摘しつつも、Freudが甘えの概念なしに済ませていることに驚きを表わしている。⁽⁸⁾ 対象に関与するときの能動的側面を強調したのが同一化の概念であるならば、甘えは受動的側面を指摘するものである。つまりは、「対象を求める」と「対象に求める」の違いであり、「愛したい」と「愛されたい」⁽¹¹⁾との違いである。愛の充足体験が、愛されつつ愛することで実現するのだとすれば、能動的行為の背後には必ず受動的願望が秘んでいることになる。土居理論によれば、能動的行為をとともなわない受動性と同じく、受動的側面によって裏打ちされていない能動性もまた問題をはらんでいると了解することができる。

欧米人の心性が「対象を求める」側面を強調するのに対して、日本人の心性が「対象に求める」側面を強調するという土居の心理学的指摘に、池上嘉彦による言語学的分析が呼応しあっていることは、⁽¹²⁾ 思考が言語によって規定されるというサピア・ウォーフ仮説を、土居が受け入れていることとの関連で興味深い。池上は、吉川幸次郎の指摘を引用して、「和歌の浦に潮満ち来れば瀉を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る」という歌の「鶴鳴き渡る」を、“cranes go crying”と英訳したときでは微妙な意味の差異が生じることを論証している。英語では、情景から自立した個体としての鶴が注目されていて、その鶴の運動あるいは場所の変化が知覚されている。しかし日本語では、鶴は全体の情景を構成する一部にすぎず、情景の全体的推移が知覚されているのである。場所の変化として把握したときは、音の発信点としての鶴がいるだけだが、状態の変化として捉えるときには、空いっぱい響き渡る鳴声を知覚するのである。日英語の発想と表現の差異を比較検討したうえで、池上は次のように仮説している。スル的言語である英語では、デキゴトに關与するある特定の個体に、とりわけ動作主として行動する人間に注目し、その個体を際立たせるように表現を構成する。他方のナル的言語である日本語では、デキゴトを全体として捉え、そこに關与する個体があっても全体に埋没させ、なるべく際立たせないように表現を構成する。このような池上の分析と土居理論を総合したとき、英語に典型的に反映されるような欧米人の心性を行動論理的、日本語に反映される日本人の心性を情況論理的とすることができよう。⁽¹³⁾

では、このような心性の差異は何に由来するのであろうか。仮説的に見通しをつけてみておこう。⁽¹⁴⁾ 市橋秀夫は、ある型の分裂病者の症状が病院の内で寛解し、外で悪化するというパターンをとることなどの諸現象を考察するにあたって、人間行動を枠づける自一他；内一外のような区別が、人間に特有なナワバリ行動に由来するものではないかと言う。排他的である動物のナワバリ行動が、種内攻撃を抑制する働きを基本とするのに対して、例えば、家族が成立するためには外婚性が成立しなければならないことから例証され

るように、人間は、排他的なナワバリから解放されることによって、社会的人間として成る道が開かれたのである。にもかかわらず、その社会構造の階層分化を契機として、再び「所有」と「地位」を媒介にしたナワバリ行動をとるようになったと、河合雅雄の所説⁽¹⁵⁾を引きつつ指摘している。だとするならば、社会的に適応している人ほど容易にナワバリを作ることができ、社会的順位の高い人ほど広いナワバリを占有することができるわけで、自分と他者、あるいは内と外との間にどのようにナワバリを張り巡らすかは、社会的に適応するための基本課題であると理解できる。

ここで、かねてより抱いていた疑念がふと湧き上がってきてしまった。旧訳聖書で、なぜ神はアベルの供えた羊をよしとし、カインの供えた穀物を顧みなかったのだろうか。そして、アベルを殺したカインが、アダムの始祖としてなぜエデンの東に住むようになったのだろうか。動物的な排他的ナワバリ行動から解放された初期の狩猟採集民であった人類が、「所有」によって、ナワバリ行動を復活したことへの原初的な表象であろうか。原罪を負うものとして人間が表現されるキリスト教的伝統では、死は罪ゆえにうけるものであり、恐怖の心をもってうけとめるべきものである。このような表象に、種内攻撃の抑制の機能を読み取ってみてもよいように思う。モーゼの十戒は、明らかに種内攻撃の抑制を律している。他方、日本人の死の感覚は、救済の問題をからませることなく死そのものに対面して、これを悲しむよりはほかなきものと捉えており、相良享⁽¹⁶⁾は、そこには死のやすらぎすら流れていると言う。おのずから成りゆく勢いにみずから委ねる論理にとって、種内攻撃の抑制という理念を規範として内在化する必然性は薄く、むしろ排他的な個体的ナワバリ行動から解放されて、家族的生活共同体を形成しようとする動機が主要な機能になっている。行動論理と情況論理のいずれの形態がより原初的であり、より革新的であるかを問うても仕方がない。ただし、河合の言うように、社会の構造化が「所有」を契機として実現し、そして、その結果として種内攻撃の抑制という理念が凝結するとするならば、日本社会では富の分配が相対的に公平になされ、貧しくても皆が同じレベルでなんとか生きて

ゆけたのだと想定されうる。他方、欧米社会では富が偏って集中しがちで、個体の生存を賄って、種内攻撃を余儀なく強いられていたと考えられないだろうか。島国という地理的条件に由来する民族的等質性や対外的危機の欠如などが、このような日本的ナワバリ行動の特性化に大きく関与していたであろうことは容易に想像できる。

3. 自一他の倫理とウチーソトの倫理

ところで、不公平が社会的交換を統制する規範の内在化を要請することは、帰属理論と並んで今日の社会心理学の主要なパラダイムとなっている公平理論の説くところでもある。⁽¹⁷⁾ 公平規範の内在化への要請は行動統制の倫理であるから、そこでは、社会的交換に伴う得失を勘定にいれて、自分と他者との関係をそのたびごとに調整する自律性を確立しなければならない。つまり、責任ある行動が要求される。しかし日本人にとって、このような倫理の内在化は、本質的なことではなかったようである。相良によれば、⁽¹⁶⁾ 日本人の心を養ってきたと考えられている仏教は、人間関係を積極的に意味づけるものではなく、むしろ否定するものである。その仏教すらも、己れの行為の正当性を、普遍的・客観的基準に則るものとして主張する姿勢を育むことができず、結局は、日本人的心性である情況論理に同化されてしまっている。日本人の心の伝統から引き出される人間理解の根源は、「おのずから」にして「みずから」なる存在であるということである。

対人関係を分析するにあたってHeiderは、常識心理学を出発点にしているが、そこでの常識はあくまでも欧米人的行動論理に基づくものである。だからこそ、因果性の認知と帰属を媒介する主要な変数として、行動主体としての責任性が、すなわち統制の位置が問題にされるのであろう。⁽⁸⁾ 土居は、日本語には、「甘え」に関連づけられる語が豊富にあることそのものが、日本人が人と人との交わりに対して敏感であることを証明していると言う。この論法を逆手に取ると、英語では、自己 (self) や自我 (ego) に関連する概念・用語が豊富である^(3a; p. 13) ということとは、それだけ彼らが、人と交わるときの己

れの正当性の主張に対して敏感であることが窺い知れる。だとするならば、Rotterによる統制の位置という概念は、⁽⁶⁾デキゴトに関与する行動主体としての責任性あるいは正当性を、他者に対して自己主張できるかどうかの問題だと理解することができる。行動論理からすれば、このように自己主張できることこそが適応的なのである。しかし、情況論理からすると、このような自己主張をしないことのほうがむしろ適応的なのである。このような社会的適応の仕方の差異が、社会構造に由来することであることは、「ヨコ」と「タテ」という概念を駆使して中根が鋭く指摘しているところである。⁽⁹⁾

統制の位置としての内的と外的の区別が、要するに「自—他」の区別であり、自己の主体性の主張であるのに対して、情況論理としての内的と外的の区別は、空間的な「ウチ—ソト」の区別であり、人と人との交わりの範囲を指定していると考えられる。土居によれば、遠慮のない身内は文字通りウチであり、遠慮のある義理が働く中間帯と、遠慮を働かす必要のない他人の世界がソトである。甘えられない他者に対しては遠慮があるが、甘えられる身内に対しては遠慮がなく、甘える必要のない他人には無遠慮であると言う。中根のヨソという概念を土居の区分に導入すれば、身内はウチで、他者はソト、他人はヨソと、日本的交わりの空間を区別することができる。

4. 視点としての内と外の二面性

土居健郎によれば、⁽¹⁸⁾ソトでオモテ（建前）とウラ（本音）を積極的に使い分けることができるのが、日本人の大人であると言う。ウチで甘えることは自然のことだが、ソトで甘えられるかどうかは基本的には相手しだいのことであるから、うかつに甘えると手痛い目に遭う恐れがある。相手が無視できるヨソ者ならば遠慮する必要はないが、無視できないソト者であるときには、建前という合意のもとに、その人と交わらなければならない。建前を守っている限りは人の好意をあてにできるので、ある程度は満足を得ることができるが、それでもなお、どの程度まで好意を示してくれるかどうかはやはり相手しだいであるから、全面的に満足が得られるわけではない。建前のウラに

はいつも、建前で満たされない思惑が本音として沈澱しうるのである。このように沈澱した思惑を土居は秘密と呼ぶが、自分の意識をもつことが秘密をもつことであるとするならば、秘密をもつことはオモテとウラをもつことであるから、自分の意識は、オモテとウラの分化を必要条件としていることになる。そして、このようなオモテとウラという二重の意識構造の成立は、建前という規範の内在化と、接近と回避の釣合いを調整する自我緩衝帯の内面化を伴っているはずである。Lewinの用語を借りれば、内在化された建前は、⁽⁵⁾現実の社会的適応を正当化する外的自我境界であり、内面化された自我緩衝帯は、沈澱する思惑を処理するための内的緊張体系の境界である。だとするならば、オモテとウラの二重意識構造は、なにも日本人に特有のことではなく、欧米人にとってもまた基本であるはずである。問題は、オモテとウラの二重意識から発生する両価性を処理する方略であり、その形成条件である。

オモテとウラの二面性は、その中に視点を含むためではないかと土居は示唆している。つまり、オモテとウラは人間関係の外と内に対応するが、外と内は個人個人によって異なるので、自分にとって外であるものも、外に属する人にとっては内になり、当然、前者のオモテが後者のウラになるからだとする。では、なぜ日本人の心性は欧米人に比べて、このような二面性に対して敏感であるのだろうか、

ここで、I.P. Pavlovにまつわる面白いエピソードを、その弟子のH. S. Liddellから聞いた話としてK. Lorenzが引用しているので紹介しよう。⁽¹⁹⁾周知のように、Pavlovの条件反射実験では、被検体のイヌは支持台に拘束されている。メトロノームの加速を条件刺激として、イヌに唾液分泌反射の条件づけをしていたLiddellは、あるとき思いついてイヌを支持台から解いてやった。するとイヌは、まだ加速されていないメトロノームへと近ずき、尻尾を振り、唾液をさかんに分泌しながらメトロノームを鼻先で押し、まるで『速くなれ』と催促をしているかのようなようだったという。この話をLiddellがPavlovにすると、Pavlovは激怒して他人に話すことを禁じたという。

Pavlov型の条件づけは、典型的には、無条件刺激（エサ）と条件刺激（ベルの音）の対提示の反復によって、無条件反射（唾液分泌）が条件刺激に対する条件反射となる、と理論化される。ここでは、実験者による実験的操作（独立変数）と被検体の反応（従属変数）との因果関係だけで事態が語られている。Lorenzは、このような条件づけの手法ではイヌの能動的本性を理解することはできないと批判している。しかし、イヌには実験にのりやすいイヌと、のりにくいイヌとがあるとPavlov自身が指摘し、その特性を論じていることからしても、イヌが行動主体であることの認識は充分にあったことと思う。にもかかわらずLiddellに対して激怒したことは、イヌの主体性は暗黙知の問題であって、状況进行操作する主体としてのPavlovに、視点を固定して認識を構成しようとしていたことを物語っている。実験にのらないイヌは、Pavlovにとっては、あくまでも不都合なイヌなのである。イヌにすればなんとも身勝手な話で、恨みごとの一つでも言ってやりたくもなるだろう。そこで思い出されるのが、急進的行動主義者と言われるB.F. Skinnerがみずから引用している戯画の中で、スキナー・ボックスの中のネズミに、“Boy, have I got this guy conditioned! Every time I pressed the bar down he drops in a piece of food.” (p. 123) と言わせしめていることである。条件づけの状況の中でスキナーとネズミが、相互主体的に作用しあっていることをよく物語ってくれているのではないか。ただし、この事態をSkinnerが語るときにはやはり、独立変数（強化の随伴性）と従属変数（ネズミのバー押し行動）との因果関係である。

条件づけが成立するかどうかは、PavlovあるいはSkinnerによる状況工作の手腕いかんによるが、同時に、イヌあるいはネズミのご機嫌しだいでもある。かなり強情を張ってはいるが、PavlovもSkinnerも、このような事態の二面性は充分に承知していたように想われる。しかし、イヌとネズミに視点を移してみたとき、このような事態はどのようにみえてくるのであろうか。いみじくも無条件反射と命名されているように、イヌにとって、唾液は否応なく分泌してしまうのである。同様に、絶食を強いられたネズミは、飢

えをいやすために必死にバーを押さざるをえないのである。つまり、好むと好まざるとにかかわらず、いつのまにやら Pavlov と Skinner の術中に陥ってしまっているのである。置かれている事態が、Pavlov と Skinner によって仕組まれていることが解っていれば、ささやかなりとも抵抗する余地もあるのだが、その仕組みを知らないときには、ただ恐れおののいて成るがままに任せるしかない。だからといって、もし Pavlov や Skinner が理不尽なまでに横暴であるならば、ただ素直に言いなりになっているだけでは、生命の絶対的危機をもたらす恐れがある。そのような危機を回避するためには、支配者を弾劾するために立ち上がるか、あるいは徹底的に不服従になるしかないだろう。Pavlov が実験にのらないイヌとして、実験室に入れると暴れまくるイヌと、無反応になってしまうイヌとがあると指摘しているのは、なんとも示唆に富むことではないだろうか。Pavlov も Skinner も、その意図を完遂するためには、イヌやネズミをそこまで追い込まないように、ご機嫌をとらざるをえないのである。

顧りみてみると、欧米人の心性を形成してきた歴史的条件も自然的条件も、日本人の心性を育ててきた諸条件に比べてみると、はるかに過酷であったように思われる。日本人の心性の形成史を省みて相良は、日本人にとって、道理は基本的に慣習・習俗であり、また常に状況において一部修正改変して新たに定立すべきものであって、普遍的な理法へと昇華されることはなかったと指摘している。道理が理法へと昇華されるためには、自らを支配する仕組みを自らの救いのために、そして翻って自ら支配するために、解き明かそうとする強い動機が媒介していなければならないのではないだろうか。すなわち、自らは自らの力で救い出さなければならない、差し迫った事情が関与しているはずである。例えば、モーゼの十戒の背景となる出エジプトなどは、その典型的な表象であろう。その点で、日本人を取り巻く諸条件は、基本的に穏やかで母性的であった。ここに、甘えの心情が基本論理となったことの原因を読み取ることができる。このような諸条件を背景にして日本人は、オモテとウラの二面性を、人との交わりをさばくための情況論理として受け入

れざるをえなかったのであろう。他方で欧米人は、行動論理としての交わり方を原則化するために、私的な思惑を抑圧せざるをえなかったのであろう。どちらが良い悪いの問題ではなく、与えられた諸条件に適應するための方略の問題である。

5. 自我機能を実現する心理学的循環経路

帰属の操作が、行動の形成や矯正に対して積極的な効果を発揮しうるのは、例えばA.Banduraの用語を借りるならば、⁽²²⁾行動主体としての自己効力感(sense of personal efficacy)が、自己調整機能の中核として関与しているからであろう。そして、例えばM.E.P. Seligmanによる学習された無力感の研究などが示唆しているように、⁽²³⁾このような自己効力感に支えられてはじめて、オモテとウラの二面性を処理することができるのだと考えられる。では、自己効力感はどのようにして発生するのだろうか。

筆者らは、⁽²⁴⁾生命活動とは、基本的にコトとモノとの相互作用に支えられて次々に事態を発生させてゆくことであると考えて、コトとモノとが循環的に相互作用してゆく経路を仮説した。概述してみると、コトとは、諸要因を包括しつつ同時的・継時的に組み合わせを調整する機能的側面であり、モノとは、そのような調整を誘導する契機となる機能的側面である。だから、モノはコトが関与する客体であるばかりでなく、同時に、モノが関与してはじめてコトが実現しうるのだから、モノはコトを規定する主体でもある。確かに、モノによる導きがないと、コトは不全態のままに停留するしかないのだが、他方、コトなくしてモノは自己実現しえないのである。モノが実現するかどうかは、言い換えると、モノと協働してコトを起すかどうかという選択は、基本的にコトしだいであり、このような自由度におけるコトの優位性を前提にしてはじめて、モノはコトを誘導する契機となりうるのである。

生命活動の基本を、可能態として与えられているモノとコトとが、相互作用しつつ実現してゆく方向性において看取するとするならば、生命活動とは、そのときどきの事態に応じて自らを働かし、あるいは働かさないことによ

て、可能態をどのように実現態へと変換してゆくかという、差異化の機能であると定義することができる。行動主体が主体としてあるということは、このような差異化の担い手としてあるということである。すなわち、差異化の担い手としての行動主体は、物に働きかけて、その物を作用の客体としてモノに変換するのである（表1の「モノ〔可能態〕×モノ〔実現方向〕＝スル」）。物がモノへと変換されたということは、その物への作用が自全態へと到っているということで、そこでは、コトがコトとして自らを成り立たせているのである（ナル）。コトが自成しているということは、客体に対してどのように働きかけたらよいかを、主体が認識していることを意味する。モノであるということは、行動主体に対して、そのモノに応じたコトを起すように要求している存在性を自己実現しているということである（アル）。だから、コトを起すにあたって行動主体は、そのコトの実現のために、どのようなモノが必要であるかを自覚していなければならない（イル：要る）。そして同時に、このような客体の自覚が、スルからナルからアルからイルへと循環してゆくことで、主体としての自覚を発生させるであろう（イル：居る）。すなわち、心理学的に仮説された表1のような循環経路をたどることを媒介として、客体と主体とを差異づけてゆくのが自我の機能であり、そこで発生する主体としての自覚こそが自己効力感であると考えられる。

主体性を自覚しているということは、意識が自己に集中していることでは

表1. 主観の発生源としての自我機能と心理学的循環経路

可能態 実現方向	モノ	コト
モノ化	スル（作用）	イル（自覚）
コト化	アル（存在）	ナル（自成）

※矢印は、仮説された心理学的循環経路を表わす。

深谷・向井(1985)⁽²⁴⁾

ない。それは、コトとしての主体が、モノとして意識化される可能性をはらみつつも、コトとして留まっている未決状態である。意識が集中しているということは、コトがコトとして自成しきれないからこそ、循環経路の自覚方向に生命活動が突出してゆらいでいる状態なのである。コトがコトとして自成してゆく状態にあるときの自覚は、コトを起している作用そのものであるから、その作用が循環している限りにおいて、意識の集中を免れているのである。だから、モノをモノとして対象化するということは、モノがモノとして自己主張している存在性を、自らのコトとの関係を立ち切って、そのモノにあらかじめ所属している特性として知覚することである。しかし、モノの特性を知覚するということは、必然的に、知覚されないモノとの関係を含んでいるのだから、対象の知覚は、モノをモノ化する作用を担う行動主体の循環経路を切断して、既にモノ化されているコトとの脈絡の中に同化してしまうことを意味する。心が働くということは、循環のユラギを未決状態のままに主観として引き受けていることであるが、集中すべき方向を求めてゆらいでいる心をおさめきれなくなったときに、採りうる方略の一つとして、同化の脈絡の中で決済してしまうという方法がある。帰属とは、おさまりきれない心のユラギをおさめるためのこのような方略の一つであり、それはまた、ユラギを同化の文脈の中へと組み込むことで、同化する自己の像を確認する作業でもある。

6. 同化を媒介する事態の意味と心理学的対処方略の発生

ところで、ワタシは、他者の顔や姿をくまなく眺めることができるが、ワタシ自身の顔付きや振る舞いを直接には視ることはできない。にもかかわらず、ワタシは、ワタシの自己像を認知していると思っている。このことは、ワタシの心の働きにとって、どのような意味を有しているのだろうか。熊倉徹雄の引用するところによれば、⁽²⁵⁾鳥類は鏡に映った自分の姿に対して、仲間や敵とみなして反応するだけであるが、犬や猫では、鏡像の非実在性に気づく。しかし、すぐに鏡への興味を失ってしまう。成育したチンパンジーとも

なると、自己の鏡像を認知するばかりでなく、鏡を使用することすらできるという。ヒトの場合には、生後6ヶ月頃には他者鏡像認知が、8ヶ月頃には自己鏡像認知ができるようになり、12ヶ月頃になると鏡を道具として使い始めるという。熊倉は、「鏡の先駆は母親の顔である」というD.W. Winnicottの言葉を引きながら、次のように述べている。幼児が母親と感情的にも身体的にも一体化しているときには、赤ちゃんが微笑めば母親も微笑み返し、赤ちゃんが苦しそうにしていると、母親の顔も不安や心配に満ちた表情になる。このような母と子の一体化した喜怒哀楽の体験を通じて、赤ちゃんは自らの情動状態を、母親の情動状態の知覚を手掛かりにして認知することで、おさめることができるようになる。しかし、母親の表情が、自らの情動状態と、必ずしも一致するものではないということに気づき始めるにつれて、母親の表情が、母親そのものの心の動きを表わす信号であることを知るようになり、さらに、一般に人間の表情の意味するところを感知できるようになってゆく。すなわち、心のユラギを類型化して決済する術を媒介として、自分と相手との表現型のズレを認知できるようになり、そのズレが同化されてゆくことで、自一他の区別が一般化されてゆくものと考えられる。

自一他の区別が、一体的な母子関係と、後続するズレた母子関係とを媒介として成立してゆくとするならば、このことを一般化して、心理学的事態の同化的認知を媒介する条件関係を、表2のように類型化することができるだ

表2. 同化を媒介する心理学的事態の意味

		事 態 が 行 動 に	
		随 伴 的	制 約 的
行 動 が 事 態 に	随 伴 化	自 発 的 事 態	誘 発 的 事 態
	制 約 化	解 発 的 事 態	他 発 的 事 態

ろう。生命活動を方向づけてゆく自我機能としての主体性が、コトのモノに対する優位性によって保証されていなければならないように、社会的主体としての自己機能は、自分のナワバリに入ってきた他者に対する優位性によって保証されなければならない。この社会的主体としての優位性を確立するために、あるときには支配的に、またあるときには依存的に振る舞う諸経験を通じて、対人交渉にまつわる摩擦を吸収するための緩衝帯として、他者を予期的に同化・異化・無視するための枠組を創造しなければならない。このような予期的自己調整は、どのような他者が自分に対してどのように働きかけてくるか（応力の予期）、そして、自分はどのような他者に対してどのように適切な行動をとることができるか（効力の予期）という、二重の方向性を持っている。

置かれた心理学的事態が、自分の行動に随伴的であり、自分もまた事態に随伴して行動できると認知しているとき、それは、主体にとって自発的行動を可能にする事態である。（表2の自発的事態）。事態が自分の行動に随伴せず制約的であり、自分もまた制約して事態に対処しなければならないと認知しているとき、その行動は他発的であり依存的である（他発的事態）。基本的には自分の行動に対して事態は随伴的であるが、事態に対してより適切に対処するために、ときには自分の行動を制約しなければならないと認知するときもある。しかし、結果としては制約を受けることになっても、事態における主体の優位性のもとに行動が解発されうると認知している限り、その結果に対する効力感を損なうことなく、自らのこととして引き受けられる（解発的事態）。事態が自分の行動に対して制約的ではあるが、自分の行動に随伴して事態が展開するとき、事態の制約感が残るものの、誘発された効力感によって相殺されてしまうだろう（誘発的事態）。動的な社会的事態というものは、自発と他発のユラギを、解発と誘発のユラギが媒介して循環しているのではないだろうか。

自発的事態とは、事態と行動とが協働しあって循環している事態であるから、そのような事態の中に在る主観は、循環しつつ実現してゆく方向性（モ

ノ) が包括的に明示されてゆくにつれて、その事態を先導する起動性を獲得し(モノ化)、主体として「ある」という意識が図化されるようになる(表3の協働的認識)。事態と行動とが制的しあって循環している他発的事態に居る主観は、事態が自分の行動をどのように制約し、また、自分の行動が事態の展開をどのように制約しているかを(コトがコト化される)、事態の自分に対する表現型を媒介にして感知して、その事態における制約と自分自身の制約を、事態を支えている背景として意識(地化)できなければ、事態を循環させることができなくなってしまう(感知的認識)。つまり、他発的主観は、事態の中に組み込まれて「いる」のである。解発的事態での主観は、行動主体としての優位性を保持するために、自分自身の行動をパターン化している必然性を操作の系列(モノ)として意識化して、その操作を実行「する」ことで発生する事態に対する効果に依存しながら、より適切な操作系(コト化)へと、自己調整してゆかなければならない(依存的認識)。制約的な事態ではあるが、少なくとも事態の展開が、行動に誘発的に随判しているときの主観は、自分を制約している事態の要求(コト)を、実現してゆく事態の中に定位しながら意識化(コト化)してゆくことで、「なる」事態の方向性を理解し、自らの従うべき位置を図上に定めてゆかなければならない(定位的認識)。このように、循環経路をたどりつつ発生してくる主観は、事態の自発性・他発性・解発性・誘発性を媒介することによって、事態と協

表3. 事態の特性を包括する認識の視点の構成

認 識		包 括 の 焦 点	
		起 動 性	被 動 性
事 態 性	図 化	モノ×モノ=ある(協働的)	コト×モノ=なる(定位的)
	地 化	モノ×コト=する(依存的)	コト×コト=いる(感知的)
視 点 の 構 成	図 化	モノ×モノ=ある(協働的)	コト×モノ=なる(定位的)
	地 化	モノ×コト=する(依存的)	コト×コト=いる(感知的)

働する自己を、事態を感知する自己を、事態に依存する自己を、そして事態の中で定位しなければならない自己を、客観的現象として認識するようになるのであろう。

言うまでもなく、それぞれの現象的自己認識は、自我の機能する方向性を意味づける心理学的事態の特性を媒介にしているのであるから、その認識特性もまた、事態の変化に伴なって変移するのが基本である。しかし他方で、媒介となる心理学的事態が偏っているとき、おのずと現象的自己認識が偏向してくるのもいたしかたない。このような偏りが同化の枠組となって、協働・感知・依存・定位それぞれの包括的な仕方を、態勢として予め方向づけていると考えられる。視点が客体に偏向している態勢にとっての認識の焦点は、依存し感知するときの具体的な準拠枠となりうるような外的に表出された現実に入れられる。そして、どのような外的現実に関心したのかを指示することによって、その外的現実を明示的に外在化させて、自己の正当性を充足できるように対処する（表4の「スル」的方略）。あるいは、焦点づけられた外的現実のあるがままを受容することで、その現実の内在化をはかり、自己の内的現実の確立のための契機となるように対処する（「アル」的方略）。他方、視点が主体に偏向している態勢にとって、事態と協働している主体性を定位することが、その基本課題であるので、内的現実に関心した焦点が置かれる。そして、どのような内的現実であるかを解釈することで外在化させ、その正

表4. 視点の態勢と心理学的対処方略

対 処		態 勢	
		外 在 化	内 在 化
実 現 の 方 向	外 在 化	指示（スル的）	解釈（イル的）
	内 在 化	受容（アル的）	布置（ナル的）

当性を認識し直すことを媒介として、自己の適応的安定をはかるように対処する（イル的方略）。あるいは、内的現実を包括する焦点の移動の布置を内在化することで、様々な現実がなりゆく場としての自己を感知できるように対処する（ナル的方略）。

対人交渉の場において、スル的方略が実現している行動主体にとって、その事態は自らの操作に随伴し、かつ、事態を工作することができる自発的状況である。しかし、視点を相手に移してみれば、このような事態は、指示によって行動を外在化しなければならない他発的情况である。ナル的方略が実現している行動主体にとって、相手にとっての状況の意味を感知してゆくことが基本方略であるから、相手に先導された他発的な事態である。そのような態勢で接触されたとき、相手にとっては、行動を自発していると感知し協働する事態となる。アル的方略が実現している行動主体にとっての事態は、相手の存在を受け入れることで、依存を解発させることが基本である。ということは相手にとって、制約的な事態を、みずからの行動に随伴させるように誘発していることになる。相手の内的思惑を解釈することで、その定位を誘発することを基本とするイル的方略のもとでは、相手は、その誘導を手掛かりにして自らの外在化を解発する状況の中に組み込まれていることになる。いずれの事態においても、心理学的態勢の二重性が関与しているのである。

7. おわりに

本稿の大半を書き上げた頃に、刊行されたばかりの二つの構想に出会うことができた。一つは河合隼雄の⁽²⁶⁾もので、その下巻の53頁に説明されている行動療法・ロジャーズ・フロイト・ユングのそれぞれの学派の相違は、表4で仮説したスル的・アル的・イル的・ナル的のそれぞれの方略的態勢に対応するものであると考えられる。二つ目は、視点について論じた宮崎清孝・上野直樹による⁽²⁷⁾もので、彼らの構想の背景にあるM. Polanyiの暗黙知についての議論で、鍵概念となる近接項と遠隔項とが、それぞれ本論でのコトとモノ⁽²⁸⁾に対応するものであることを知った。これらにもうちょっと早く出会っ

ていたら、触発されて本論の叙述が変わっていたかもしれない。しかし、大筋は同じなので、前章までの議論をもとにして、少し再考を加えてペンを置くことにしよう。

Rotterに代表される帰属位置の内的-外的という構想が、⁽⁶⁾心理学的事態に対処するにあたって、スル的方略を基調としていることは、これまでの議論で明らかにすることができたと思う。だから、ナル的方略を基調とする日本人の感覚に、しっかりと馴染みきれない想いが残るのであろう。帰属理論を初めて構想したHeiderが、⁽¹⁾欧米人の常識的発想を素朴に分析することから着手したように、日本人の発想を支えている心的構造を、欧米人を支えている心的構造と対比させつつ、理論的に実証的に分析を加えてゆくことが、筆者らにとっての今後の課題である。本論は、そのための第一歩であったが、第二步を踏み出すための手掛かりとして、オモテとウラという二面性を、本論の筋に即して再考しておきたい。

⁽²⁹⁾土居健郎は、「わかってほしい」「わかられている」「わかられたくない」「わかりっこない」という、面接者の感じる患者の印象をもとにして、精神病理学的な疾病分類を提唱している。この分類を精神病理学的にでなく、日常の挫折的態度の表われの読み取りとして考えるとき、「わかられたくない」という態度の背景には、スル的方略の挫折があるように思われる。つまり、スル作用の実現は、働きかける相手と自分がスルことの自覚とに支えられているが、働きかけの挫折は、イルことの定位づけを動揺させることになり、その心のユラギをおさめるために、動揺しているウラの心を隠し、作用そのものを過度に外在化しようとするユラギの集中を反映して、「わかられたくない」という印象を発生させるのだろう。前述した、Pavlovやアロンのエピソードを思い起してみたい。「わかられている」という印象の背景には、ナル的方略の挫折を読み取れる。働きかける作用が停止しているために、事態の成り行きにまかせる他に手立てがなくなってしまうと、事態の他発性⁽²³⁾に心が集中していることを反映している。例えばSeligmanの指摘する、無気力の発生する事態を考えてみて欲しい。「わかりっこない」という印象は、

事態の成り行きに依存しきれないでいる心のユラギをおさめるために、情況から自己を切り離して、その自己の存在性を主張しようとする、アル的方略への過度の集中を背景にしていると考えられる。例えば、暴走族の心情や態度などを考えてみればよいだろう。「わかってほしい」という態度の背景には、情況の中に定位できずにいる自己の存在の自覚という、イル的方略の挫折を読み取ることができる。土居の言うように、いずれにせよオモテとウラの両価性がからんでいると思われるが、このように仮説してみることで、表明された態度の背景に、どのような特性をもったオモテとウラが、どのようにならみあっているのかを考察する手掛かりが与えられるであろう。

本論では、心理学的対処方略の発生過程を考察するために、表1から表4までに示したように、水準ごとに要因間の相互作用の特性を仮説してみたが、それぞれの水準に共通する理論の筋は、内と外との関連づけであった。より上位の水準が与えられることによって、より下位の水準での循環が、包括されて特性づけられていくと思われる。このような包括の過程についての詳しい考察は、次の機会に譲りたい。ご批判、ご検討いただければ幸いである。

引用・参考文献

- 1 F. Heider 1958 大橋正夫（訳）対人関係の心理学 誠信書房 1978
2. (a) K.G Shaver 1975 稲松信雄・生熊讓二（訳）帰属理論入門 誠信書房 1981
- (b) M.E. Shaw & P.R. Costanzo 1982 古畑和孝（監訳）社会心理学の理論 サイエンス社 1984
- (c) M. Ross & G.J.O. Fletcher 1985 Attribution and social perception. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.) *Handbook of social psychology*, vol. II Random House, pp. 73-122
3. (a) 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- (b) C.L. Kleinke 1978 島津一夫（監訳）自己知覚 誠信書房 1984

- (c) 水口礼二 1985 無気力からの脱出 福村出版
4. B. Weiner, D. Russell, & D. Lerman 1976 The cognition-emotion process in achievement-related contexts. *J. Pers. Soci. Psychol.*, 37, 1211-1220
 5. K. Lewin 1935 相良守次・小川隆 (訳) パーソナリティの力学説 岩波書店 1957
 6. J. B. Rotter 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1, 1-28
 7. 深谷澄男・向井敦子・川瀬正裕・斎藤舘 1985 原因帰属の位置と対人関係域 日本心理学会第49回大会発表論文集, pp. 447-448
 8. 土居健郎 1980 「甘え」の構造 (第2版) 弘文堂
 9. 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 講談社現代新書
 10. 水口礼二 1985 人格構造の認知心理学的研究 風間書房
 11. 大橋秀夫 1980 「甘え」の弁証法：自己の表象を巡っての甘えと同一化の考察 土居健郎教授還暦記念論文集刊行会 (編) 臨床精神医学論集 星和書店, 419-447頁
 12. (a) 池上嘉彦 1981 「する」と「なる」の言語学 大修館書店
(b) 池上嘉彦 1982 表現構造の比較：スル的な言語とナル的な言語 国広哲弥 (編) 日英語比較講座, 第4巻 大修館書店, 67-110頁
 13. 安西徹雄 1983 英語の発想 講談社現代新書
 14. 市橋秀夫 1984 空間の病い 海鳴社
 15. 河合雅雄 1979 森林がサルを生んだ 平凡社
 16. 相良享 1984 日本人の心 東京大学出版会
 17. L. Berkowitz (Ed.) 1976 *Advances in experimental social psychology*, vol. 9 Academic Press
 18. 土居健郎 1985 表と裏 弘文堂

19. K. Lorenz 1973 日高敏隆・大羽更明（訳）文明化した人間の八つの大罪 思索社 1973
20. I.P. Pavlov 1960 川村浩（訳） 大脳半球の働きについて 岩波文庫 1975
21. B.F. Skinner 1972 *Cumulative records*. 3rd ed. Appleton-Century-Crofts
22. 祐宗省三・他（編）1985 社会的学習理論の新展開 金子書房
23. M.E.P. Seligman 1975 平井久・木村駿（監訳）うつ病の行動学 誠信書房 1985
24. 深谷澄男・向井敦子 1985 心理学的循環経路の析出による自己体制化活動についての省察 国際基督教大学学報I-A「教育研究 27」, pp. 129-154
25. 熊倉徹雄 1983 鏡の中の自己 海鳴社
26. 河合隼雄 1985 カウンセリングを語る 創元社
27. 宮崎清孝・上野直樹 1985 視点（認知科学選書1）東京大学出版会
28. M. Polanyi 1966 佐藤敬三（訳）暗黙知の次元 紀伊国屋書店 1980
29. (a) 土居健郎 1977 方法としての面接 医学書院
(b) 土居健郎 1976 オモテとウラの精神病理
土居健郎（編）精神医学と精神分析 弘文堂, 1979, 124-140頁

**THE TWO-FOLDEDNESS OF THE VIEWPOINTS
OF *SURU* AND *NARU* IN
THE STRATEGIES OF PSYCHOLOGICAL COPING**

Sumio Fukaya and Atsuko Mukai

“Attribution theory,” one of the imperialistic theories in social psychology today, generally characterizes people as naive scientists striving to understand, predict, and control the course of events in which they are concerned. On the basis of observation, they form beliefs or theories about what is causing the observed events. When an individual is inclined to interpret in terms of the contingency upon his own behavior or his own relatively enduring dispositions, J.B. Rotter (1966) has termed this a belief in “internal control.” When the events are typically perceived as the result of luck, chance, fate, as under the control of others, or as unpredictable, this belief has been labeled as “external control.”

I-E scale, constructed by Rotter, has been used for measuring individual differences in a generalized belief for internal versus external control. Comparing the locus of control between Japanese and American college students, Japanese are much more external than American. From the standpoint of attribution theory, the belief of internal or skill determined control is assumed to be more adjustive than that of external or chance determined control. Then, is it possible to say that Japanese are more maladjustive than American? Surely, we Japanese feel some hesitation to say yes to the skill determined belief. This, however, does not necessarily mean that we are maladjustive in our culture.

Let us take an example out of Japanese traditional poems:

「和歌の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る。」 The phrase of 「鶴鳴き渡る」 can be literally translated into English as “cranes go crying,” but a delicate, essential difference remains unsolved. In the English expression, cranes are noted as acting subjects independent of the background. In the Japanese expression, on the other hand, the transitory scene, including cranes as a component, is perceived as a whole. As Y. Ikegami (1981; 1982) noted, English as a language of *SURU* (DOING) – logic has a way of making actors conspicuous from the background, in contrast with Japanese as a language of *NARU* (BECOMING) – logic, which has a way of burying actors into the whole. This kind of difference is generally noticeable not only in language but also in attitude and behavior, as referred by T. Doi (1980) and others.

Authors (1985) theoretically supposed an interactional process between *Mono* and *Koto*, and hypothetically analyzed out four directions of the interactive actualization, taking a viewpoint of the behavioral subject of self-organizing activity, as summarized again in Table 1. *SURU* (DOING) is in the direction of actualization when “I” am doing an action to a thing, where *mono* is being actualized into *MONO* mediated by *Koto*. Secondly, *NARU* (BECOMING) is under actualization when my action is becoming in effect. Thirdly, when I choose a thing to do something with, I am recognizing it as being there, or *ARU* (BEING). Fourthly, when I am going to do some action, I am being actualized in such a consciousness, or *IRU* (HAVING), as I am having myself as a subject, which is activating myself to act upon a thing.

This actualized activity of self-organizing will be subjectively insighted as being spontaneous, released, induced, or enforced, mediated by the observation as to whether my behavior and its behavioral context are contingent or dependent each other, as shown in Table 2. When I take my behavior as spontaneous, I expect myself to be a subject coping with other

things or persons surrounding me. This feeling of spontaneity is based on my subjective expectation of subordinatedly co-acting others. When the surroundings, which I am embedded in, is perceived to have a spontaneous direction of changing as a whole, I feel enforced to guess and accept the direction so as to adapt myself. Therefore, feeling spontaneous or enforced is a phenomenal aspect of the two-foldedness dependent on the way of interaction, as assumed in Table 3. So is feeling released or induced. Table 4 hypothetically shows some psychological strategies to facilitate the self-organizing activity of others to actualize, coping with these aspects of the two-foldedness of *SURU* and *NARU* viewpoints.